
さだめが行く

シャラシャラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さだめが行く

【Nコード】

N2166Z

【作者名】

シャラシャラン

【あらすじ】

僕はあの日以来がんばって生きている。見たこともないユニークスキルを駆使して強くなっている。そして今でも覚えているあの、全てがおわり、始った日の事を。僕はがんばって亥生きている、大切な仲間と共に――――

設定（前書き）

こんにちは

最新不定期に文才があまりないシャラシャランです

これからご愛読お願いします

設定

ID名 フェイト

本名 笹木 運命ささき んだめ

体重 67 kg

身長 170 cm

年齢 16

性別 男

容姿

名前でわかる人もいるかもしれませんがネギまのフェイト・アーウェンクルスの髪型で色も一緒です。目は緋色。本人は目に生気が無い事を気にしている。

性格

みかけによらず優しくて明るい。でも交戦的、たまに変なスイッチが入ると……？

スキル

短剣・投剣・索敵・武器防御・隠蔽・戦闘回復・ランス・拳士・？
？・？・？・？（74層時点）

元βテスター出身でキリト（原作主人公）とは現実でも友達でβ

テストの時も一緒に夜遅くまでプレイしていた仲。上層プレイヤー、攻略組の主力の内の一人。キリトと一緒にソロプレイヤー。でもたまに一緒に狩りや飯を喰ったりしている。

第一話 ゲーム・スタート

俺は今第一層主街区から少し離れたところでモンスターを狩っていた

「はっ！」

短剣を右になぎ払った後すぐ左にも切り込む

「ギャン！」

何か変な声を出して倒れる猪

「おお!! スゲェ!!」

「さすがだな、フェイト」

「これぐらいどうって事無いよ、キリト」

俺は振り向き後ろで俺がモンスターを倒すのを見ていたキリトとク
ラインに言う

「なら俺も!!」

とクラインが剣をかついで他の猪に向かっていく

「うおりゃ！てりゃああ！！」

剣をブンブン振り回すがかすりもせずしりもちをつく
そしてその隙をつかれて猪の突進をくらう

「ぐべらあ！？」

そしてゴロゴロと俺とキリトの足元に転がってくる

「い……痛い」

「ははは、そうじゃないよ。重要なのは初動のモーションだ、ク
ライン」

「って……にやろう」

そして立ち上がり

「シな事言ったってよお、キリト……アイツ動きやがるしよ」

「動くのは当たり前だろ。練習用のカカシじゃないんだし」

「フェイトが正論だ」

「でもよお」

ぶつくさ言いつつ剣を構える

「モーション、モーション」

呪文のようにクラインがくり返し言っている

「うりゃっ！」

これまでとはまったく異なる動きで地面を蹴ったら
片手用曲刀基本技が猪に命中した。そしてそのままHPバーを吹き飛ばした

「うおしゃいいいいい！！！！！」

クラインがガッツポーズをする

「初勝利おめでとう」

「……でも今倒した敵、他のゲームで言うのスライムぐらいだぞ」

「えっ！？マジで！？てっきり中ボスかと」

「「ないない」」

俺はキリトとシンクロして手のひらを左右に振る

「しっかしなあ、いくらなんでもこれがゲームの中だなんて信じられないよな」

確かにそうだ

俺の周りには綺麗な森林が生い茂っている

風が草木を揺らし

その風が俺にあたる

でもこの世界はゲームの中の世界なのだ

俺の体はデータでできている。現実の肉体は今ベッドに横たわって頭に《ナーヴギア》をつけている。これがこのゲームVRMMOソードアート・オンラインを動かすゲームハードの名前だ。そしてスゴイのが視覚や聴覚、触覚、味覚嗅覚などを全てナーヴギアにアクセスさせるのだ。それによる仮想空間への接続を、次のように表現した。

完全フルダイブと。

「さてと……どうする？ 勘がつかめるまで、もう少し狩り続けるか？」

「ったりめえよう！……と言ってえとこだけど。そろそろ一度落ちてメシ食わねえとな。ピザの配達五時半にしまってからな」

「用意しゅうとうだな……」

「んじゃここで。何かあったらよろしくな」

「ああ、こっちこそ」

「また訊きたい事があったら、よんでくれよ」

「おう」

そして、俺達にとってこのゲームが楽しかったのはここまでだ。

「あれ？っ」

ログアウトしようとしたクラインが頓狂な声を出した

「なんだこりや……ログアウトボタンがねえよ」

「……そんなわけないだろ」

「いや……キリト、クラインの言う通りだ」

俺はゲームのウィンドウを出して見たがなかった

「……ないだろ？」

「ああ、ない」

確かにコレはおかしい

いくらゲームスタート初日でも自分の現実の肉体に戻れないなど、今後のゲーム運営にもかかわって来る。βテスト時、ログアウトボタンがあった場所は何も無い空白になっている

「おいおい……嘘だろ、信じられねえよ。今ゲームから出られないんだぜ、オレたち！」

「落ち着け、クライン」

「そうだ、フェイトの言う通りだ。多分GMがなんとかしてくれるよ」

直後。

世界はその有りようを、永久に変えた

突然、リンゴーン、リンゴーンという鐘の音のようなサウンドが響き渡った

「んな……っ」

「何だ!？」

すると俺らの体をブルーの光がつつんだ。
テレポートだ。

再び目を開けると、広大な石畳、周囲を囲む街路樹。
ここは間違えなくゲームのスタート地点である《はじまりの街》の
中央広場だ。

俺の隣にもキリトとクラインがいる

そして頭上に

【WARNING】そして、【System Announcement】とでてきた

すると上空に赤井ローブを来た顔がないアバターが出て来た

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一
の人間だ』

「な……………!!」

茅場晶彦。

彼はこのゲームを作った張本人である

同時に彼は俺の……………

『プレイヤー諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅している事に気づいているだろう。しかしゲームの不具合ではない。繰り返す。これは不具合ではなく、《ソードアート。オンライン》本来の仕様である』

「は？」

「なん……………だと？」

『諸君は今後、この城の頂を極めるまで、ゲームから自発的にログアウトする事はできない』

この城とは、アインクラッドだろう

『……………また、外部の人間の手によってナーヴギアの停止あるいは解除もありえない。もしそれが試みられた場合……………』

そしてわずかな間をおき

『ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

……………ようするに、死ぬと言う事だ

「ふざけてる」

『すでに外部世界では当局及びマスコミを通して告知されている。ちなみに、現時点で、プレイヤーの家族友人等が警告を無視してナーヴギアを強制解除を試みたが例がすくならずあり、その結果』

『——残念ながら、すでに213名のプレイヤーが、アインクラッド及び現実世界からも永久退場している』

嘘だろ

もう、死人をだしたのか、アンタは——

『そして、充分に留意してほしい。諸君にとって《ソードアート・オンライン》は、すでにただのゲームではない。もう一つの現実とすべき存在だ。……今後、ゲームにおいて、あらゆる蘇生手段は機能しない。ヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君のアバターは永久に消滅し、同時に』

『諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊される』

いま、俺の左上には青い横線がかがやいている。そのうえに342／342と数字が見える。

ヒットポイント。命の残量。これがなくなったら死ぬと言う事だ

『諸君等がこのゲームから解放される条件は、たった一つ。アイコンクラウド最上部、第百層までたどり着き、そこにまつ最終ボスを倒しゲームをクリアすればよい。その瞬間生き残ったプレイヤーはログアウトされる事を保障しよう』

「クリア……百層だとお!？」

突然クラインが喚いた

「で、できるわきゃねえだろうが!？ベータじゃろくに上がれなかった聞いたぞ!！」

それは事実だった

千人のプレイヤーが参加したβテストでは二カ月の期間があったが、

クリアされたフロアはわずか六層。

『諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え』

アイテムウィンドウを開くと、アイテムがおいてあった。
名前が《手鏡》

それをダブルクリックすると、白色の光が俺を包み込んだ

「え？」

手鏡をみるとうつっているのはさっきまでのファンタジーっぽい顔ではなかった。

正真正銘、俺の現実の顔だった

「お前…誰？」

「おい…………お前誰だよ」

多分あれがキリトとクラインなのだろう

「お前がクライン（キリト）か!？」

両者おどろいた顔をし、鏡をおとす

『…………以上で《ソードアート・オンライン》正式サービスのチュウトリアルを終了する。プレイヤー諸君の——健闘を祈る』

そして茅場晶彦は跡形も無く消えた

周りがざわめき始める

悲鳴、怒号、絶叫、罵声、懇願、咆哮などがあちらこちらから聞こえる

俺はキリトとアイコンタクトをとる

「クライン、ちょっと来てくれ」

そして広場の裏通りに入る

「いいか、よく聞け。俺はすぐにこの街を出て、次の街へむかう。お前も来い」

キリトはクラインの肩をがっちりつかんで真剣な眼差しで話している

「で、でもよ。おりゃ、他のゲームでダチだった奴等と一緒に徹夜で並んでソフトを買ったんだよ。そいつらもうログインしているはずだ。……おいて行けねえよ……」

「……………そっか」

そして俯きこっちを見る

「フェイト……は？」

「俺はお前について行くよ。キリトの考えている事はだいたいわかるよ」

「わかった。なら、ここで別れよう。何かあったらメッセージを飛ばしてくれ。……じゃあ、またな、クライン」

「ああ……キリト！」

俺らは体を北西に、次の拠点となる街がある方向に向う

「キリト！おめえ、本物は案外カワイイ顔してるじゃねえか！結構好みだぜ俺！フェイト！お前もお前だぜ、結構イケメンじゃないか！」

アイツ……

「お前もその野武士ヅラのほうが十倍似合っているよ！」

「ああ」

歩いている内にいつのまにか街のゲートにたどり着いた

「なあ、キリト」

「……なんだ？」

「よろしくな……これからな」

「フッ、わかったよ。」

「俺短剣^{ダガー}だから前衛な、片手剣よりかはリーチ短いし」

「はは、わかったよ」

そして俺とキリトは、はじまりの街の北西ゲート、広大な草原と森、それを超えた先にある小村——そしてその先にどこまでへと続く、はてなきサバイバルへと向って走り出した

第一話 ゲーム・スタート（後書き）

かなり急テンポで話が進みました

第二話 別れ

「とうちゃくく」

俺とキリトは夕日が消える前にホルンカの村についた

「なんとか、あまり敵と遭遇せずについたな」

なんとか陽が落ちる前につこう、と全力疾走して来たのだ

「んじゃ、まともな装備買うか」

「そうだな……」

その後、狭い広場に面した武器やに向かう。

クラインと一緒にいた時に狩っていたのでアイテム欄にはいらぬ素材アイテムが余っていたので、それを売却して防具を買った

「どれにする？」

キリトに問うが、コイツはファッションセンスが無いと思う

「俺はこの茶色の革のハーフコートにするよ」

「んじゃ俺はこの白いコートにするわ」

ようするにキリトの色違いだ
ちなみに、そこそこ防御力はある

「……………俺……………だなあ……………」

ふと鏡を見て彼がつぶやく

「……………それでなんでこの村に来たんだ？」

「ここには片手剣を使う人には必須のクエストがあるんだ」

キリトいわく、ここにとある民家には病気の女の子がいてその子を助ける為に花つきのリトルペネントと言うモンスターを倒すと《リトルペネントの胚珠》が出るらしい。それを届るとクエスト終了。するとアニールブレードがもらえて、それは第三層ぐらいまで使えるらしい。

「いいなあ…………」

第三層まで使えるとかなり金も節約できる

「短剣使いもそんなクエスないかなあ」
「あるよ」

「え!？」

思わず驚いた

「あの家の内にいる男性に話しかけるとクエストが貰えて、報酬としてちよつと性能がいいダガーが貰えるらしいぞ」

「おお……………ありがとう」

「ああ、じゃあ俺もクエストのフラグ立てて来るよ」

「オツケー、また後で」

「ああ。広場集合な」

俺はその家に入ると怪我をした男の人がいた
その人の頭上にはクエストのランプが点滅している

どう言ってもクエストスタートになるのだが、気分的にこう言う

「どうしたんですか？」

「実は……」

私は木を伐って他の街に売っていてね
毎日毎日、同じことをくり返しているんだ

だがある日

私はいつもの場所に木を伐りにいったんだが
突然モンスターに襲われてね

この通り傷を負ってしまっただけ

このままじゃ作業も出来ない、あのモンスターを倒してくれないか
？」

「はい、わかりました」

「たのんだよ」

「それでそのモンスターとはどんな奴なんですか？」

「たぶん、ここらじゃ希なビッグボアだよ」

ビッグボア

確かに希なモンスターだ

クラインと倒していた猪のデカイ版だ

ちよつと生息地はここから離れているが

「わかりました」

この先少し使えるダガーに比べればたやすい物だ

「おお、フェイト」

「待ったか？」

「いや、全然」

「そうか……」

「で、どうだった？」

キリトが首を傾げて訊く

「ああ、報酬欄にダガーって書いてあったからそうだと思う」

「んじゃ、ここで一旦お別れか？」

「……………そうみたいだな」

沈黙が俺らを襲う

「……………」

「キリト……………生きろよ」

「ああ、お前もな」

そして
あつい握手をする

「じゃあな」

「ああ、またいつか！」

「なんかあったらメールしろよ！」

「お前もな!!」

そしてお互い手を振り

反対方向への森へと歩いて行く

また、一人なのか

俺は

「また……………会えると……………いいな」

第三話 一人

キリトと別れてから20分ほど

マップを見てもわかるが、かなりさっきの村が離れている

ここにビッグボアがいるらしい

「楽にクリアできるといいなあ……」

ま、そんなわけないか

名前からして完全に猪の親玉っぽいし

と、考えながら装備のウィンドウを開けて耐久値などを見るが、大丈夫だ

数分後

「あれか………」

俺は草むらの後ろに隠れて森の中でひととき存在感がある巨体をみる

茶色の毛にキバが長い

当たったらかなりダメージをもらいそうだ

「よし、行くか」

俺はでかい猪がちょうど後ろに向いた時に飛び出す

「はっ！」

そのままダッシュし技をくりだす

ダブルスラッシュ
短剣基本技

短剣が赤色のエフェクトにつつまれて猪に攻撃をあてる

すると向こうがコチラにきづき、咆哮をあげる

耳が引きちぎれそうになるが、そんな事を気にしてられない

すぐさま、後ろにステップし、どんな状況にでも耐えられる体勢になる。

「……来い!!」

まるで言葉がわかったかのようにビッグボアが突進し、こちらに向って来た

すぐさまかわし、すれ違いざまに剣をたて側面を斬る
一応これでもダメージ判定があるのだ

そしてまたボアの背後をねらい、同じスキルをお見舞いする

そう、実はこのボア、巨体ゆえに体の反転が遅いのだ

「おらおら!!」

そして、そのままボアが反転する方向と同じ方向に動くとかルクル回っているだけなのである。

マヌケな姿だ

と、考えつつも攻撃はやめない

そして――

「ブギィィ!!」

悲鳴をあげ倒れるビッグボア
と同時にピシッと固まりポリゴンの欠片になって消える

「ふう……案外楽だったな」

まあ、ここに来るのにかなり時間がかかってしまったが
レベルアップもできたし良かったか

突然ウィンドウが出て来てクエストの達成を教えてくれて
あとは、あの男の人に報告すればいいだけだ

「んじゃ、行きますか」

「とうちゃく」

本日二度目の同じ発言
しかも、同じ場所で

すぐさま、怪我をしているおっちゃんの家飛び込みクエストを終
了する

パンパカーン

つと、ラッパの音が聞こえる
クエスト終了とレベルアップだ

「お、やった」

とりあえずガッツポーズ

ソードアート・オンライン

SAOには二つのステータスがある

筋力と敏捷力である

自分は短剣使いでスピード重視なので筋力に1敏捷力に2ふる

さっきレベルが上がったときもそうした

もちろんだがキリトはいない

「これから、どうしようか………」

やはり

このままレベル上げでもするか

そしてアイテム欄を開け、新しく手に入ったダガー《ミスリルダガー》をみる

ステータス的にもまだまだだがこの先これを使えるようにせねば・
・
・

実は俺はまだスキルの二枠目を決めていないのだ
普通、ソロプレイで進むのならば迷わず《索敵》なのだが

まだ、第一層だ
そこまで注意すべきモンスターはいない

βテストの時は《投剣》スキルを選んでいたはずだ

「……………そうするか」

空いているスキル欄をダブルクリックし《投剣》を選ぶ

するとまた、パンパカパーンとラッパも音が誰もいない村に響く

――
むなしい
――

隣に誰かいると

まだ、このデスゲームもまだ楽しいのだと思う

第三話 一人（後書き）

短めでしたね

次回はもっと長く書けるかな・・・

第四話 創設

あれから数日

現在、第五層主街区

目の前に鉄灰色の髪の毛の人がいる

「私と一緒にギルドを作らないか？」

「はぁ……………」

説明しよう！

こうなるまでの事を

「もうすぐだ!!!! もう一踏ん張りだ!!」

「「「オオオオオオ!!」」」

俺は第四層の迷宮区のボス部屋の中で攻略組と呼ばれる高レベルプレイヤーと一緒にボスと戦っている

「これで終わりだあああああ!!!!」

俺は短剣を構えダッシュし敵の前でジャンプする動作をする

すると

俺の短剣が黄色のエフェクトにつつまれ
短剣切上げ技ムーンカッターを発動される

そのまま真上に飛び敵を真っ二つにする

そして

断末魔のような叫び声を出しポリゴンの欠片になりバラバラになった

それを呆然と見るプレイヤー達

俺は途中で剣を上に掲げる

「おおおおお!!!!!!」

「やったああああ!!!!」

「勝った!!!! 勝ったんだああ!!!!」

ここにいる全員が口々に嬉しさを声にだす

「よくやってくれた」

後ろから肩をたたかれる

「いやいや、皆のおかげだよ」

ってか誰だこの人?

「後で打ち上げをしないか？」

「お？なんだなんだ？」

「打ち上げ？たのしそうじゃん」

「俺も入れてくれよ！」

「んじゃ、おいらもお！！！！」

そして、第五層へと繋がるゲートを起動さして
全員で主街区の一番大きい酒場へとなだれ込み、宴会をしていたの
だが

「私と一緒にギルドを作らないか？」

「はぁ……………」

俺の目の前には赤色のマントをはおっている、鉄灰色の髪の毛の人

「突然、どうしたんですか？」

「いや、何。君の戦いを見てね。かなりの実力をそろえているからね」

「なるほど、なるほど」

適当に答えながらパンやサラダやらを口のほうり込む

「どうだね？」

「……いや、ありがとうございます。でも……俺、ビーターなんですよ」

ビーター

それはβテストに、ズルする奴を指すチーターを掛け合わせた、SAO独自の蔑称である。βテストってだけで自分は嫌われるのだ

ヒドイ話しだ

「いや、私は格段そんな事は気にしていないぞ」

「え？」

俺は口へ運ぼうとしたフォークを止る

「そのような事を言う奴は言わせておけば良い」

「……………」

「どうかね？」

「あんた……」

良い奴だなあ

思わず涙が出そうになった

「いいぜ、入ってやろうじゃないか」

一呼吸おき

「名前は？」

「ヒースクリフだ」

「俺はフェイト」

「そうか。では」

「ああ、よろしくな」

そしてお互い手を出しあつく握る

「で、今何人なんだ？」

「私と君を合わせて、二人だ」

「は？」

パーティーデン？

「二人だ」

「ようするに俺ら二人だけか？」

「ああ、そうだ。これから人を増やして行くつもりだ」

「な、名前は？」

せめてこれは決めてるよな

「まだだ」

「さいですか……」

「それで案はあるかね？」

「俺に訊くの！？！？」

「ああ、そうだ」

「そんなクールに反応されても」

斜め右下を重いため息と一緒に見る

「なら、こんなのどうかね？」

いいのを期待しましょうか

「紅白騎士団」

おもわず席からころげ落ちた

「どんなおめでた騎士団だよ!!」

「かなりいいと思ったんだが……」

「まったく……」

「血液騎士団なんかはどうかね？」

「なんでそうなったの!?!?」

「フェイト君は白色の服をきていて、私は赤色のマントを」

「白血球と赤血球ですか!?!?!? どんな発想だよ!?!?!?!」

手を机にバンツと叩き付ける

「ふむ………だめか」

「あたり前だよ!?!?!」

案外おちゃめなんだなこの人

「せめて騎士団はいいたい」

「へいへい」

はあ……

「じゃ、こんなのどうだ？」

「？」

「――血盟騎士団」

「Knights of the Blood か」

「どうだ？イカすだろ？」

「まあ確かにそうだな。採用しよう」

「んじゃ名前決定ね」

「ああ、ではあらためて、よろしくたのむ」

「ああ、こちらこそ」

俺は知るよしもなかった

ヒースクリフが俺の身内だなんて

第五話 新しい人たち

こんにちは

ええ、最前線で高速でダガーを振り回し、風の如く動いていたら『白銀の疾風』とか通り名ができた、フェイトです

ヒースクリフもそれなりに名が売れて来て

最前線をヒースクリフと一緒に歩くと人ごみがパツクリと別れます

今の最前線は第十層

「はあゝ、何かいい武器ないかなあゝ」

俺は机にとっぷりと言う

実は前に使っていた武器はもうこの層で使えそうにはないのだ

「ヒースクリフよお。何かいい情報ない？短剣関連で」

「そうだな……………」

そして間をおいて言う

「この付近の鍛冶職人のフリーマーケットを見てみたらどうかね？」

「鍛冶職人の？」

「ああ。鍛冶職人が自分の作った武器等を露店で販売しているのだ」

「ふうん…………面白そうだな」

席を立ち店を出て――

「おい、あんた」

「ん？」

「あんた、白銀の疾風フェイトか？」

「ああ、そうだけど。なんか用か？」

「なあ、俺とデュエルしねえか？」

なんだ、そんな事か

実は最近有名になってきてからよくこういう事があるのだ

「おう。いいぜ」

この世界でのデュエル上の絶対のルールは、初撃決着ルールである
でないと、何かあったとき大変なのだ

「こっちは、準備ができたぞ」

「ああ、こっちもだ」

そして両者OKボタンを押す
カウントダウンが始まる

当たり前だが

俺がデュエルすると聞いてヒースクリフも店の外に出てき、ほかの
プレイヤーもいる

3

2

1

0

「うっしやあ！」

もう使い慣れた短剣を握りなおし突っ込む

そして

一瞬で相手の目の前に動く

「な！」

突撃^{サージ}技使い当てようとするが、さすが最前線の町にいただけある。
それを受け止める

「ぐっ！さすがだな。『白銀の疾風』とよばれるだけある」

「あんたこそ。あのダッシュ攻撃防ぐなんてな」

そのまま剣を上弾き一撃入れる

「ぐっ」

喋っているからだ
バーカ

上にWINと文字が出てくる

わあーっと歓声がわきあがる

「見事だフェイトくん」

「ありがとう」

軽くヒースクリフに言うておく

「んじゃ、俺フリマ行ってくるわ」

「ああ、わかった。誰か良いプレイヤーを見つけたら勧誘しても構わないか？」

「オッケーいいよ。別に変な人じゃないのなら」

そしてマーケットの方へと向かってゆく

「ここか……」

こんなデスゲームの中であってもこういうマーケットや大通りなど

は人で賑わうものなのだ

「全部見んのも大変だしな」

俺はチラチラ見ながら歩いてゆく

「ん？」

少し目を引く短剣があつたのでしゃがんでじっくりと見る

「なあ、この短剣のステータス見ていいか？」

顔を上げ見ると店員とおぼしき女の子を見つけたのだが

寝てる

「あ、あの……君……」

そして肩をポンポンと優しく叩く

「ハ、はい！すいません、先生！！」

せ、先生？

「あ……」

そしてその女の子は顔を真っ赤にし口をアクパクさせている

「こ、この短剣のステータス見ていい？」

「あ、その、いえ、あ、はい、どうぞ」

むっちゃ、てんばってるな

そんな事を考えながらその短剣をクリックする

「ほお……」

なかなかいい

威力も短剣にしては申し分無い
にしては、そこまで重くない

「これいくら？」

「あ、はい！それなら……になります」

「ん、じゃあ買った」

「え、はい！ありがとうございます！」

ものすごく喜んでる

そして

俺はお金を払いそれを装備した

「ありがとな、結構いい装備みつかったしな」

「あ、いえ」

「ねえ、名前教えてくれよ」

「え、名前ですか？」

「うん、俺はフェイト」

「フェイトねえ……ええ！？フェイトってあの白銀の疾風の！？」

「あ、うん。そうそれ」

「う、うそだぁ！！」

ヒデエ

「いや、本当だよ」

「た、確かにその真っ白の服。それっぽいですけど」

「いや、だから本人だよ！」

「おう！フェイト！」

ふいに後ろから呼ばれる

あの顔は……………

「クライン！！」

俺はすぐさま駆け寄り肩を叩く

「久しぶりじゃないか、元気だったか？ギルドを立ち上げたって本当か？」

「おいおい、質問ばっかしないでこっちもさせろよ。まあギルドを立ち上げたってのは本当だ。それよりお前、知らねえ間に有名になりやがって」

そして俺の後ろにいる武器屋の女の子を見る

「へえ。珍しいな、女性プレイヤーか。は！まさかお前ナンパでもしてたのか！？」

「するかよ！」

「えっと、あのこの人本当にあの、白銀の疾風なの？」

「ああ、このバカがな」

「バカはよけいだ」

そして肘でわき腹をつく

「あ、んじゃな。俺ギルメン待たしてるし」

「おう。じゃあな」

そしてクラインは人ごみの中に消えていった」

「これで俺が本人だってわかったろ？」

「はあ……………リズベツト」

「へ？」

「私の名前はリズベツトよ」

「んじゃ、よろしくなリズ」

「リズって何よ」

「あだ名だよ」

「いきなり馴れ馴れしいわね」

「いいじゃん。こっちの方が。なんか友達っぽいし」

「友達ねえ…………」

「んじゃ一まず友達登録しとくは」

「私もしとくわ」

そしてお互いウィンドウを操作し登録許可をする

「んじゃまたその内来るは」

「あ、うんじゃあね」

「じゃあな、リズ」

「じゃあね、フェイト」

「やあ、フェイトくん。気に入った武器は見つけたかね？」

「ああ、それと新しい友達もゲットできたしな」

「そうか」

そして何かコーヒーのような物を口に運ぶ

「それと、新しい入団者だ」

「へえー。お前が認めるなんて珍しいな」

「ああ。来たまえ」

「どうも」

そして近寄ってきたのは栗色の髪の毛を腰ぐらいまで下ろした美
な女性だった

「こんにちは」

「あ、はいこんにちは」

「自己紹介したまへ」

「はい団長」

団長って……

「私はアスナと申します」

「本名だろそれ」

「そうだな、確実に私も聞いた時そう思ったよ」

「う……」

「初めて見たぞ。本名出すプレイヤー。もじりとかだったらかわるけど」

「そ、そこは触れないでください……」

シヨボンとする

「ああ、すまん。とりあえずよろしく」

「よろしくお願いします！副団長！」

手を差し出したのに敬礼された

「ん？副団長？」

「ああ、そうだよ。君が副団長だよ」

「さいですか……」

第五話 新しい人たち（後書き）

ヒロイン登場！！

ちなみにスキルはオリジナルです

金銭関係はわからないので正確な額はだしませんでした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2166z/>

さだめが行く

2011年12月24日00時52分発行